

伊勢国府跡 19

2017年3月

鈴鹿市

伊勢国府跡 19

2017年3月

鈴鹿市

例言

1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が平成28年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第35次）調査の概要をまとめたものである。

2 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市 市長 末松剛子

調査指導

伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査委員会）

川越俊一（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）

金田章裕（京大名誉教授）

和田勝彦（財団法人文化財虫歯菌害研究所常務理事）

渡辺 寛（皇学館大学名誉教授）

文化庁文化財部記念物課 三重県教育委員会 社会教育・文化財保護課 三重県埋蔵文化財センター

調査担当 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

文化財課長 浅野 浩

副参事兼発掘調査グループリーダー 新田 剛

発掘調査グループ 主幹 藤原秀樹 副主幹 田部剛士 主査 吉田隆史 嘱託職員 太田有香

3 発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

鈴鹿市広瀬町字荒子 891 番（GAIF-A 区）面積 89.4㎡

字荒子 892 番（GAIF-F 区）面積 69.6㎡

調査期間 平成29年1月10日～平成29年3月9日

4 現地調査は藤原が担当し、太田が補佐した。本書の執筆・編集は藤原が担当した。遺物の整理には鈴鹿市考古博物館 嘱託 吉田真由美が協力した。

5 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕 吉岡健次・前川義輝

〔屋内整理〕 永戸久美子・加藤利恵・前出みさ子・村木 泉

6 Fig.1 では国土地理院2万5千分の1地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を、Fig.2 では国土地理院20万分の1地勢図「名古屋」の一部を、Fig.5 では昭和36年撮影航空写真の一部を加工して使用した。

7 座標は過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第VI系を用いている。なお、図中の方位は座標北を示す。

8 本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9 調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の他に、地権者並びに地元各位をはじめ、下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

田中秀一・麻生勝美・新名 強

三重県教育委員会社会教育・文化財保護課・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館

亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化財室

広瀬町自治会・広瀬町能楽野自治会・西富田町自治会・中富田町の山自治会・中富田町の町自治会

目次

例言

目次

I 遺跡の位置とこれまでの調査成果	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 6AIF-F区の調査成果	5
1 基本層序	5
2 調査の方法	5
3 検出遺構	5
4 出土遺物	5
5 6AIF-F区のみまとめ	6
IV 6AIF-A区の調査成果	6
1 基本層序	6

2 調査の方法	6
3 検出遺構	7
4 出土遺物	8
5 6AIF-A区のみまとめ	8
V 全体のまとめと今後の課題	9
参考文献	10

表目次

Tab.1 調査履歴	2
------------	---

Tab.2 報告書抄録	26
-------------	----

図版目次

Plate 1 Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 /Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な寺院・官衙関連遺跡	11
Plate 2 Fig.3 調査区位置図	12
Plate 3 Fig.4 調査区配置図 /Fig.5 調査区周辺空中写真 /Fig.6 方格地割宇河案	13
Plate 3 Fig.7 6AIF-A区サブレンチ断面図	14
Plate 4 Fig.8 6AIF-A区遺構平面図 /Fig.9 6AIF-A区と第1次調査荒子1区との関係図	15・16
Plate 6 Fig.10 6AIF-A区瓦出土状況図	17
Plate 7 Fig.11 6AIF-F区遺構平面図 /Fig.12 6AIF-F区サブレンチ断面図	18
Plate 8 Fig.13 出土遺物	19
Plate 9 Fig.14 出土遺物	20
Plate 10 6AIF-A区調査区全景(東から) / 6AIF-F区調査区全景(西から)	21
Plate 11 6AIF-A区調査前風景(東から) /6AIF-A区全景(西から) /6AIF-A区全景(東から) /SD340・SD343 西端(東から) /SD340・SD343 東端(北から) /SX341-6区瓦出土状況(北から) /SX341-3区瓦出土状況(北西から)	22

Plate 12 SX341-4区瓦出土状況(北西から) /SX341-5区瓦出土状況(西から) /SX341 瓦出土状況【平瓦の上に反転丸瓦(北から) /SX341 瓦出土状況【平瓦の重なり】(北西から) /サブレンチ1 SD342(東から) /サブレンチ3SD342(北東から) /SD340・SD343 サブレンチ2(南東から) /SD340・SD343 サブレンチ4(北東から)	23
Plate 13 6AIF-F区調査前(南東から) /6AIF-F区全景(西から) /SD338・SD339(南から) /SD338・SD339(北東から) /SD342 東端・耕作溝(北から) /SD338 サブレンチ5・SD339 サブレンチ6・SD342 サブレンチ7	24
Plate 14 出土遺物 平瓦・出土遺物 丸瓦	25

1 遺跡の位置とこれまでの調査成果

史跡伊勢国府跡（長者屋敷遺跡：以下、遺跡としては「長者屋敷遺跡」）は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に位置する。一帯は標高約49mの台地上、水沢扇状地の中期面に相当し、台地南面に広がる谷底平野との比高差は約20mである。

遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に、南半は西富田町に属する。また、遺跡の西半は亀山市域に及んでいる。当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり、水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がり、処々に牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や「長塚」「中土居」などの字名に残るように基壇や土塁状の高まりが各所にみられることから「矢卸長者」の伝説も伝えられ、古くより知られている。遺跡の範囲は南北約1,300m・東西約700mと広いが、瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約800m・東西600mに限られる（村山1992）。瓦散布範囲の南端中央で平成5年度に確認された国府政庁と政庁の北で発見された建物群を合わせた73,940㎡が、平成14年3月19日に伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は8世紀中頃から9世紀初頭と狭い範囲に限られている。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残され、古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。延喜式に知られる伊勢国の鈴鹿・河曲・朝明・榎の各駅家を經由して尾張国に至る経路のうち、鈴鹿駅家は鈴鹿関付近に、河曲駅家は伊勢国分寺および隣接する河曲郡衝（狐塚遺跡）周辺に位置したことは疑いない。

古代官道の遺構としては、鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が9mの道路痕跡が発見されている（林2005）。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられる（田部2016）。鈴鹿市国府町（以下「伊勢国府推定地」）と同国分町の伊勢国分寺を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古藪（鈴鹿駅家推定地）と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると、鈴鹿関や広瀬町の伊勢国府が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い、官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられるが、まだその実態は明らかになっていない。

長者屋敷遺跡で国府跡が確認されるまでは、鈴鹿市国

府町が、国府という地名とともに、伊勢国総社と考えられる三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が残ることなどから、古くより伊勢国府の地と考えられてきた。

伊勢国府推定地一帯ではこれまで各所で緊急調査が行われている。三宅神社遺跡の第1次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された（新田1997）。第2次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が（藤原1997）、第5次調査では墨書土器や斎串などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認されている（林2001）。また、天王山西遺跡では施軸陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている（杉立2001）。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安時代末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている（石田2001）。また、富士遺跡では鋳造遺構が検出され（田部2007）、黒色土器がまとまって出土している（吉田隆2008）。このように、国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布する。初期および後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられているが、今のところ明確に官衙であることを決定付ける遺構は確認されていない。

長者屋敷遺跡において初めて調査が行われたのは昭和32（1957）年である。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行っていた京都大学の藤岡謙二郎が鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り調査を行った。当時、国府町に国府方八町域を想定していた藤岡は、長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも、鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した（藤岡ほか1957）。

鈴鹿市では平成4（1992）年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し、平成5年度の「矢下」地区における国府政庁跡（以下「政庁」）の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した（藤原ほか1995）。政庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土居南」の各地区において礎石建瓦葺建物群（以下「北方官衙」）が発見された（新田1997・1999ほか）。

また、三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査で北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなった（宇河1996）。調査を担当した宇河雅之は国府政庁域を含む南北6区画・東西5区画の方格地割を想定し、北端に位置する金敷を平城宮における松林苑に相当すると考えた

Tab.1 調査履歴

回数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要		
7月1次	1957	A地区	広瀬町字南野			学術	礎石建物		
		B地区	広瀬町字矢下				基礎		
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚	921110～930129	110	学術	鎌倉き道構		
			南野1				広瀬町字南野971	115	礎石建物
			箕子1				広瀬町字箕子981	110	瓦葺・溝
2次	1993	6AIF-F	広瀬町字仲起1226・矢下1134ほか	931129～940228	238	学術	政庁後院・東園橋・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝		
3次	1994	6AJA-Jほか	広瀬町字矢下1131～1133	941006～941227	750	学術	政庁正院・西園殿・西軒廊・西内溝・西外溝		
3.2次	1994	照調調査区	広瀬町字中上屋 龜山市能登町字中上屋	940601～940817	2,700	照緊急	溝		
4次	1995	6AJA-Aほか	広瀬町字矢下・箕子・仲起	950920～951219	254	学術	政庁後院・北外溝・西内溝・西園橋		
4.2次	1995	照調調査区	広瀬町字中上屋 龜山市能登町字中上屋	950605～950713	1,600	照緊急	溝		
5次	1996		広瀬町字丸内	960620～960716	133	市緊急	窓穴住居・溝		
6次	1996		広瀬町字矢下	960625～960719	288	市緊急	溝		
7次	1996	6ACE-A	広瀬町字南野972.972.972.2.973	961007～970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝		
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚1279-2	971016～980210	632	学術	傾壊瓦・礎石建物・溝		
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	980223～980320	21	市緊急	政庁南辺部		
		B地区	広瀬町字矢下				26	政庁西園殿	
		C地区	広瀬町字仲起				5	溝	
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚1279.3.1279-5	980901～981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑		
11次	1999	6AJA-Hほか	広瀬町字矢下1176ほか	990901～000131	863	学術	溝・礎石建物・南門		
12次	2000	6AIF-CFほか	広瀬町字中起・箕子	001001～010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・窓穴住居・溝		
13次	2001	6AHD-ABほか	広瀬町字中起1237.1240.1～3.1241	010920～020214	714.2	学術	溝・土坑		
14次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中上屋1282-1	020106～020111	246	市緊急	礎石建物・溝		
15次	2002	6AJJ-Dほか	広瀬町字矢下1154ほか	020424～020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壌墓		
16次	2002	6AJF-Bほか	広瀬町字矢下、西宮田町字東起・矢卸	020620～020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓・古墳四溝・方形石溝墓		
17次	2002	6ADB-A～E	広瀬町字西野3300	020806～021130	4,640	学術	掘立柱建物・溝・窓穴住居		
18.1次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下1126	030417～030630	243	学術	溝		
		6AJD-E	広瀬町字矢下1144	030421～030630	267	溝			
		6ALE-A	西宮田町字矢卸1015-17	030528～030630	21	なし			
		6ALE-B	西宮田町字矢卸1015-17	030528～030630	11	なし			
		6ALC-G	西宮田町字矢卸1015-15・16	030528～030630	48	なし			
18.2次	2003	6AEA-A	広瀬町字中上屋1283-2	030902～	360	溝・土坑			
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内2609-1	040831～041118	220	学術	溝		
		6AFA-A	広瀬町字中上屋1290-1	040913～041118	200	なし			
		6ABB-A	広瀬町字長塚1275	040928～041118	550	窓穴住居			
20次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内2606-1.2607-1.2608-1	050822～051130	200	学術	溝		
		6ACF-A	広瀬町南野945-6	051011～051130	140	溝			
21次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野3242	060719～060908	500	学術	溝・土坑		
22次	2007	6ADC-A	広瀬町字西野3311	071001～071206	326	学術	風倒木・ビット		
23次	2007	一	龜山市			龜山市緊急	溝		
24次	2008	6AEB-C	広瀬町字中上屋1282-2	080616～080717	835	市緊急	溝・傾瓦葺多数		
25次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野3243番.3248番	081001～081226	690	学術	溝・鎌倉き道構		
26次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野3313の一部	081218～081226	55	学術	溝・土坑・風倒木		
27次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚1244番	090817～091216	580	学術	溝(道路跡)・ビット・風倒木		
28次	2010	6ABA-B	広瀬町中上屋1305番1	101101～110131	59	学術	なし(風倒木のみ)		
29次	2011	6ABA-C	広瀬町中上屋1299番1	111201～120229	116	学術	溝		
30次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内2612番1	121201～130228	81	学術	なし		
31次	2013	6AAC-D	広瀬町字丸内2600番1	140122～140314	140	学術	ビット		
32次	2013	6AFF-F	広瀬町字丸内2626番	140218～140328	63	学術	なし		
33次	2014	6AIB-C	広瀬町字箕子1038番	150105～150304	61	学術	ビット		
34次	2015	6ACH-C	広瀬町字南野955番3	160201～160315	132	学術	溝・風倒木		
		6AIF-E	広瀬町字箕子985番		81	溝・土坑・風倒木			
		6AIF-A	広瀬町字箕子981番	170113～170109	89.4	学術	溝・礎石建物・土坑		
35次	2016	6AIF-F	広瀬町字箕子982番		69.6	溝			
合計					26967.2				

(以下『拡大方格地割案』とする)(宇河 1997: Fig.6)。

方格地割についてはその後の調査で北方官衙域において南北3区画・東西4区画の区画施設が徐々に置き換えられる一方(吉田真 2005・小倉 2006・水橋 2005)、政庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全くは確認されなかった(水橋 2005・吉田真 2005)。

平成25年度の第31次調査から平成27年度の第34次調査にかけて、拡大方格地割案の北西部及び東部の確認調査を行ったが、いずれも区画溝等は確認されなかった。結局、方格地割で確実なもの南北大路を中心に東西4ブロック・南北3ブロックと考えることが妥当とされた(新田 2013・藤原 2014・2015)。

方格地割の北に位置する金敷は、長者伝説の舞台として知られ『高津瀬村誌』には「金敷」の項に「古長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キ若シ廣瀬村ヒヘイニ陥ルノトキハ之ヲ堀レト」と記される(水野 1907)。こうした口伝の存在から、金敷の発掘は古来忌避されており、

II 調査に至る経緯と経過

平成27年度の第34次調査において、方格地割の南への広がりを確認するため、荒子地区に6AIF-E区を設定した。平成4年度第1次調査の「荒子1」地区の北東にあたる。この地区ではもとより瓦の散布が見られ、調査によって礎石建物の基礎地帯と思われる遺構が確認されている(浅尾 1993)。第20次調査の6AGF-A調査区で確認された方格地割東限とみられる溝SD266の南方の延長線上の畑を選び6AIF-E調査区としたところ、まさにその延長と考えられる南北溝SD335を検出した。

古い航空写真や地図を再度確認したところ、SD335線上に南北の地割が、荒子1区にも南側に東西の旧地割の名残と見られる痕跡が見出されたため(Fig.5矢印①・②)、荒子1区の建物を囲むように何らかの方形区画が存在する可能性が高いと考えられた。(藤原 2016)

そこで、今回の第35次調査においても、引き続きこの荒子地区の遺構群の性格を把握するため調査を行うこととした。SD335の延長線で見出された東西地割との交点に当たる地点を6AIF-F区とし、また荒子1区で確認された建物の再確認と東西地割の確認をかねて荒子1調査区の南に6AIF-A調査区を設定した。現地調査は平成29年1月10日から着手し、3月9日の埋め戻し

昭和の初めに陸軍北伊勢飛行場が建設された際も金敷を避けて軍用地が定められた。

現状は一見前方後円墳を思わせる高まりとなっている。地権者の意向で本体の発掘調査は行えず、測量調査を行ったのみである(田部 2008)。しかし、外周部の調査の結果(田部 2007・2009)何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えている。また、方格地割の中軸線に相当する位置で見えられた幅24mの南北大路が金敷や政庁の中軸線と一致することが確認され、3者の計画的な関連性は確実であろうとされている(田部 2010)。

ところが、政庁と方格地割の間には官衙的な遺構や連続する区画溝が確認されておらず、幅約150mの空白地帯となっている。また、出土した遺物にも若干の時間差があることから、政庁と北方官衙が一体のものであるかについては若干の疑念がある(新田 2001・吉田真 2002・藤原 2015)。

をもって終了した。以下、調査日誌を抄録することで調査の経過にかえる。

《調査日誌抄》

1月10日(火)調査開始。

1月13日(金)翌週からの現地作業に向け、基準点から座標を振込み、6AIF-A・6AIF-Fの2調査区を設定する。

1月16日(月)重機を投入し表土除去予定であったが、前日からの降雪により、当地では極めて稀な30cm近くの積雪となったため、雪が消えるまで当面延期となる。

1月24日(火)積雪もほとんど消え重機を再投入の予定であったが、再び前夜から降雪となり周囲の交通が混乱したため、結局作業中止となる。

1月25日(水)本日から作業員2名を投入して、手掘りで6AIF-A区のスプトレンチ1から発掘作業に着手する。東西溝SD342を検出。

1月26日(木)ようやく重機による表土除去を実施。6AIF-F区では安定した包含層が無い場合、基礎層直上まで一気に掘削する。昨年検出した溝SD335に連続すると思われる南北溝SD338を確認。掘削完了後、作業員を投入して調査区の壁立ての後、遺構検出を開始。

午後からは重機により6AIF-A区を表土除去に取り掛かるものの、瓦溜が表土直下の各所にみられたため作業

にてこずり、翌日に持ち越しとなる。

1月27日(金) 重機による6AIF-A区の表土除去作業を続け、午前中でようやく完了する。作業員は6AIF-F区の検出作業を行った。検出遺構は2条の南北溝と複数の風倒木痕のみ。午後からは6AIF-A区の壁立て作業に移行する。

1月30日(月) 午前中降雨のため作業中止。

1月31日(火) 作業員は6AIF-A区西側から遺構検出作業。遺構検出に平行して、表土直下の攪乱された瓦溜を除去。しかし、下層で原位置を保つとみられる瓦堆積の存在が判明したため、作業は遅延として進まない。東西溝SD340とそれを破壊する新しい溝SD343およびその上層の瓦を含む整地層SX341の存在を確認。調査員は6AIF-A区西のサブトレンチ1で検出された東西溝SD342を精査する。

2月1日(水) 6AIF-A区において引き続き上層の攪乱された瓦層を掘削する。瓦溜にサブトレンチ2を設定して瓦層と下層の溝の関係を確認する。

2月2日(木) 引き続き瓦溜の上層を掘削する。

2月3日(金) 引き続き瓦溜の上層を掘削する。両調査区に遺構平面実測用のグリッドピンを打つ。

2月6日(月) 6AIF-A区瓦溜上層の掘削がようやく終わる。溝および瓦を含む整地層を精査する。調査区東側の写真撮影を行う。6AIF-F区の遺構平面実測を実施する。

2月7日(火) 降雨のため作業は中止。

2月8日(水) 午前中に小型重機を用いて6AIF-F区の一部を拡張。SD342の東端を確認する。6AIF-A区全体の清掃・写真撮影および平面実測を行う。6AIF-A区SD340にサブトレンチ4を設定し掘削する。

2月9日(木) 史跡伊勢国分寺跡保存整備検討会議のため作業は休み。

2月10日(金) 朝、時雨のため作業は中止。

2月11日(土) 6AIF-A区の平面実測を行う。

2月13日(月) 荒子1区との座標のずれを確認するため再度測量を行う。午後、基準点からレベルを移設し、各サブトレンチに断面実測用の水系を張るため、グリッドピン等を設定。

2月14日(火) 6AIF-A区サブトレンチ2の断面を実測する。6AIF-F区SD338・SD339のサブトレンチ5・6を掘削する。

2月15日(水) 6AIF-A区サブトレンチ3のSD342を掘削する。6AIF-F区のSD342端部を検出するため近現代溝の一部を掘削する(サブトレンチ7)。その後、6AIF-F区全体の写真撮影および平面実測を行う。

2月16日(木) 6AIF-A区サブトレンチ1・4の断面図を実測する。本日から瓦溜SX341の瓦出土状況の平面実測に取り掛かる。

2月17日(金) 瓦出土状況の実測を継続するも、降雨のため作業中止。

2月20日(月) シートはさずして全体清掃。午後あいにく降雨となるも、伊勢国府跡発掘調査指導会議の現地視察が行われた。その後、考古博物館講堂にて調査成果を報告と、それに対する指導を受ける。

2月21日(火) 6AIF-A区の写真撮影のため清掃の予定も、雪ちらつき作業中止。

2月22日(水)～24日(金) 別業務のため作業中止。

2月25日(土) SX341の瓦出土状況の平面実測を継続する。

2月27日(月) SX341瓦出土状況実測がようやく完了する。

2月28日(火) 6AIF-A区全体の清掃後、全景写真撮影。SD342サブトレンチ3の瓦を取りあげ、断面図を実測する。6AIF-F区の平面実測図にレベルを入れる。作業員は本日で引き上げとなる。

3月1日(水) 6AIF-A区の実測図にレベルを入れる。SX341の瓦サンプルを取りあげる。

3月2日(木) 雨のため作業は中止。

3月3日(金) SX341の瓦を一括して取上げる。

3月7日(火) SX341の残りの瓦を一括して取り上げて作業終了。

3月8日(水) 小形重機にて埋め戻しを行う。

3月9日(木) 機材撤収。

Ⅲ 6AIF-A 区の調査

1 基本層序

地表から 0.4 ~ 0.5 m の厚みがある黒色土が堆積している。それを除去すると直ちに地山にあたる黄褐色粘質シルトの基盤層が現れる。地山上面には耕作痕が残る。この面まで完全に攪乱を受けている。

地山面には多数の風倒木痕が見られるが、いずれも地山の黄褐色シルトとよくなじんでおり、伊勢国府が営まれた時期よりかなり遡る年代に生じたものであろう。

調査区南半では地山面は緩やかに南に向かって傾斜し、拡張区南辺では耕作土の厚みは 0.8 m ほどになる。

2 調査の方法

前年度調査の 6AIF-E 区において Y=45970.0 ラインのすぐ東側で地割の区画溝とみられる南北溝 SD335 が確認されたため、その続きを 40 m 南側の 6AIF-F 区で確認することにした (Fig.4)。

まず、X=-123900.0、Y=45970.0 を基点に東西 10 m、南北 5 m の調査区を設定し、地山直上まで小型重機で表土を除去したところ、SD335 の続きと見られる南北溝 SD338 とその西側に平行する溝 SD339 が確認できた。さらに、両溝を追うように南西側に東西 4 m、南北 3 m の拡幅を行った。その後、人力で遺構検出を行った。検出後は、グリッドピンを用いて 3 m の方眼を設定し、平面実測を行った。検出した遺構は原則掘削を行わないが、サブトレンチを入れて土層を確認した。

その後、6AIF-A 区の調査において、東西溝 SD342 が確認されたため、東端を見つけて SD338・SD339 との関係を確認するべく、再度重機を導入して調査区の南西隅に 2 m × 3 m の拡張区を設け、SD342 の東端を確認した。

3 検出遺構 (Fig.11)

SD338 6AIF-F 区を直線的に南北に横断する溝である。方位は、およそ N1° W で、北方の方格地割の振れとほぼ等しい。最大幅 2.0 m を測り、延長 7.7 m を検出した。

北壁のサブトレンチ 5 断面の観察では (Fig.12)、本来の掘り方が深さ 0.4 m、幅 1.5 m の箱型溝であった。底面の標高は 47.3 m である。東側の肩を切るように幅 1.0 m、深さ 0.1 m の浅い耕作溝①がかかっているため、本来の掘り方より幅広くみえる。また、掘方の西壁側には礫・地山土の細粒を含む溝②・③が重複していることが確認された。埋土のなじみ具合から新しいものではな

いとみられる。この溝の延長線上では検出面でやや大ぶりの瓦片も出土した。

溝本来の埋土は上層から④黒色シルト (黒ボク)、地山土ブロック細粒を含む黒褐色シルトである。④層はほぼビュアな黒ボクである。⑤層もほとんど遺物を含まないようだが、底面から 1 点平瓦片が出土した。西肩および東肩から底部付近にかけて黒色土・細礫を含む灰黄色シルト⑥・⑦が流れ込みみだり状態で堆積している。

SD339 SD338 から西に 2.4 m はなれて平行する南北方向の直線的な溝である。削平を受けて痕跡状となっており、調査区北壁から約 3 m のところから現れ、南壁まで延長 4.2 m を検出した。幅は最大で 0.4 m、深さは 0.1 m にも満たない。底面の標高は 47.6 m である。南壁際のサブトレンチ 6 (Fig.12) では、埋土上層①は粘質の黒色シルトで、下層②は粘質の黒色シルトと黄褐色シルトがモザイク状に混じる。

SD342 6AIF-A 区サブトレンチ 1・3 において確認された東西溝であるが、当初設定した調査区には現れていなかったため、拡張区を設けて確認を行った。拡張区西壁からわずか延長 0.8 m 分を検出した。幅はほぼ 1 m である。拡張区を南北によぎる幅約 1.2 m の近現代溝に切られるため本来の東端は確認できないが、この近現代溝の幅内におさまり SD339 には達しない。近現代溝の一部を掘削し断面観察を行ったところ (サブトレンチ 7: Fig.12)、上層には新しい溝①が重複していた。本来の埋土は上層がわずかに地山土細粒を含み粘りを持つ黒色シルト②で、下層が明黄褐色土・砂礫混じりの黒色シルトである。

ビット 調査区内で 4 基ほどのビットを確認した。径は 0.2 ~ 0.3 m の円形である。ただし、配置には規則性は見出せず、建物等とは把握できない。付近からわずかに山茶碗片も出土しているため中世の小規模な集落が存在した可能性がある。

近現代溝 拡張区の大部分を占める幅約 1.5 m、深さ約 0.4 m の南北溝である。断面は逆台形である。埋土は灰色の砂質シルトで、礫を多く含む。検出面付近では掘り拳大の礫と共に瓦の出土が見られた。調査区内でわずかに東にカーブし、南東側の谷に向かうようである。

4 出土遺物

溝を中心に瓦片が若干出土したが記載・図化に値するものは特になく。近現代溝の上面から山茶碗片・土師器

片が各1片出土している。

5 6AIF-F区のみとめ

本調査の課題は、第20次調査6AGF-A区で確認されたSD266および34次調査6AIF-E区で確認されたSD355によって想定される方格地割東辺清延長の確認であった。調査の結果、想定的位置から規模や埋土の状況も類似する溝SD388を検出することが出来た。

さらに、SD338の西側に平行する溝SD339を検出した。両者の間隔はほぼ2.4m(8尺)であり、築地のよな遮蔽施設の両側溝として掘られた溝であった可能性が高い。ただし、瓦の出土量が少ないことから、瓦葺とは断言できず土塀のような構造が想定される。

過去の調査例として、方格地割西辺区画とされる第14次調査6AEB-E区SD129・SD130(吉田真2002)および18-2次調査6AEB-E区SD255・SD256(水橋2005)の関係が、西側に幅0.5～0.6mの細溝、東側に幅2.0～2.5mの幅広の大溝のセット関係であり、今回確認したSD338・SD339の関係と極めて類似している。ただし、西辺の溝間は約3.0m(10尺)であり若干規模が大きい。細溝が基準線として機能し、広溝は採土のための大きく掘られたのであろう。

調査の結果として、SD129・SD255ラインおよびSD335・SD338ラインが方格地割の西限および東限である可能性がさらに高まったといえよう。また、方格地割の施行に際しては、東西面を塀で明確に外部と区画し、

権威を示す意図があったと想定される。ただし、これまでの調査で明らかにされているように、すべての計画が区画北方まで貫徹して施工されているわけではない。

第2に、前年度の概観(藤原2016)において、過去の航空写真からこの一帯に、方格地割の120m方眼とは異なる、東西120m、南北約100mの区画が存在する可能性が生まれた。今回の調査で、予想通りその南北区画(Fig.5 矢印①)に相当するSD338・SD339とともに東西区画(Fig.5 矢印②)に相当するSD342を検出した。調査の着手時には、SD338が当調査区内で西に折れてL字状になることを期待していたが、結果としてSD342はSD338・SD339とは直接連続せず、SD338・SD339は南に向かってそのまま伸びている。

よって、残念ながら今回の調査範囲のみではSD342がこの院の南限区画に相当するのか、さらに南に広がる院の内部の区画溝なのかのいずれかは判断できない。

調査地の南側は、浅い谷が入るため一段低くなっているものの平坦な畑地であった。SD338・SD3399が単にその谷へ抜けているだけの可能性もあるが、Fig.5の矢印③で結ぶ地割線まで広がる約120m四方の区画であった可能性も否定できない。

ただし、この範囲は昭和40年代に土砂採取が行われ、その後廃棄物処分場として埋め立てられているので、残念なことによりこれ以上の追跡は不可能である。

IV 6AIF-A区の調査

1 基本順序

地表から0.3mの黒色耕作土が堆積しており、それを除去すると直ちに地山にあたる灰黄褐色砂質シルトが現れる。この層は、旧表土である黒色シルト(黒ボク)と下層の基盤層である黄褐色粘質シルトとの漸移層にあたり、0.2mほど掘り下げると基盤層が現れる。部分的にはあるが表土下0.1mの浅さで新しい瓦廃棄土坑(瓦溜)が広がっている。その分、下層の遺構遺物の残りはよいといえる。

調査区の南には浅い谷が迫っており、調査区西端ではすぐ南が一段低くなっており、設定したサブトレンチ1でも南側では黄褐色シルトの基盤層が沈み込んでい

2 調査の方法

対象とした土地では平成4年度の第1次調査において「荒子1」区の調査が行われ、東西・南北方向の溝・土手状遺構および瓦溜を検出し、「北、西、南の土手状遺構遺構を含む一郭(東西18m×南北8m)は長塚1地区の例から(瓦葺礎石)建物跡の可能性もあろう」(浅尾1993)とされている。今回の調査ではその建物遺構の再確認をかねて、十文字状であった荒子1調査区の東西トレンチのすぐ南に接し、南北トレンチの一部がかかるように設定した(Fig.9)。

具体的には、X=123902.0、Y=45935.0を基点に東西30m、南北3mのトレンチ状の調査区を設定し、この調査地の南の地境あたりを通ると期待された想定東西溝を引っ掛けるため、調査区の西端Y=45935.0ライン

とY=45959.0ラインに南に向けて幅1mのサブレンチを境界いっぱいまで設定した。

地山直上まで小型重機で表土を除去しようとしたが、表土直下に瓦溜が多数存在したため、それを避けて掘削可能な部分のみ地山面まで掘り下げた。そのため作業員による掘削の割合が予想より多くなった。上層瓦溜の遺物取り上げの都合上、調査区に西から5m間隔で1～6区の区割り設定を行った。その後、人力で上層の瓦溜の除去と遺構検出を行った。検出後は、グリッドピンを用いて3mの方眼を設定し、平面実測を行った。6A1F-F区同様に検出した遺構は原則掘削を行わず、サブレンチを入れて土層を観察するにとどめた。瓦溜については上層の攪乱を受けて欠け、角が取れたものはすべて一気に取り上げた。その結果、上層の攪乱された瓦溜に保護されたかたちで原位置をとどめた瓦溜が下層から検出された。これらについては出土状況を平面実測した。瓦溜の面が浅く、このまま埋め戻すと今後の耕作で瓦の攪乱が進むと予想されるため、瓦は埋め戻さずすべて取り上げることとした。形のままとまっているものについては番号を与え1点ごとに、その他は1m単位で取り上げた。

3 検出遺構 (Fig.8)

SD340 延長19.5mのほぼ東西方向の溝である。北側大部分を重複して掘られた溝SD343に破壊されているため、正確な幅は不明である。あまりSD343の影響を受けていないサブレンチ2 (Fig.7-1)の底部の立ち上がり具合から、幅1.5～2m、深さは検出面から0.35～0.45mとみる。埋土は均質で、微細な地山土粒を含む粘質の黒色シルトである (Fig.7-1 サブレンチ2⑤～⑧・Fig.7-2 サブレンチ4⑨)。遺物はほとんど含まない。荒子1調査区SD03に該当する。同概報では調査区内で南に曲がるとされているが、これは重複する新しい風倒木痕の黒色土部分を誤認したものであると判明した。

SD343 延長23.8mを測る、SD340と重複し、東西に約2mはみ出す形で掘られている。幅は、北肩が調査区外に及んでいるために不明であるが、東西では調査区北壁から1.5mほど、中央部ではSD340をほぼ覆う2.3m以上の幅がある。埋土は、西よりのサブレンチ2においては粘質の黒色シルト・黄色シルトブロックおよび礫混じりの黒褐色シルトで、瓦を含む (Fig.7-1④)。深さは0.2～0.4mと浅く、北に向かって深くなるが、

SD0340の上層を掘りこむのみである。これに対し中央部のサブレンチ4では、深さ0.5m以上と深く掘られSD340の底面を掘り抜く。埋土はいずれも粘質の黄色シルト・黒色シルトブロックを含む灰黄色シルトまたは黒・黒褐色シルトのレンズ状の堆積が複雑に重なりあうような状況が観察される (④～⑩)。これに対し北壁付近では下層に黄褐色シルト粒を含む黒褐色シルトの水平の堆積 (⑩・⑪)がありやや様相が異なる。推定建物の掘込地業の可能性もある。

SX341 SD343の北側の表面を覆うように広がる。東西はほぼSD340の範囲と一致する。比較的均質で、SD343等の埋土と比較して明るい色合いの暗褐色砂質シルトを主体とする整地層である。厚さは0.2～0.3mで北に向かい厚くなる。上層には瓦を含んでおり、瓦には原形をとどめるものも多い。瓦の出土状況を見ると (Fig.10)、平瓦が上 (凹)面をそろえ数枚重なったものや、平瓦の上面に丸瓦が反転して乗ったものなどがみられる。よって、屋根から転落した状態ではなく、平瓦を数枚重ねた上に丸瓦をおいた状態で運搬し、敷き均し最中の褐色土上に投棄し、埋め込んだといった状況が想定される。1次調査概報のSX03はこれに該当する。

なお1次調査概報ではこの整地層部分を地山とみたようで、土手状遺構と判断している。

SD342 SD340から2.2m離れて並行する溝である。サブレンチ1・3において確認され、6A1F-F区に到る延長約34mを確認した。サブレンチ1・3いずれにおいても南側の肩が検出できていないため幅は不明であるが、6A1F-F区で1mよりは広く、少なくとも1.4m以上ある。深さは0.45m程度である。底部の標高は47.5m前後である。今回の調査範囲においてはSD338・SD339に対応しての振れを正確に求めるのは困難であった。

埋土については、サブレンチ3 (Fig.7-4)がSD342本来の姿をよくとどめている。北側を後世の浅い溝①・②に切られるが、上層は黒色土③で、直下に黄褐色シルトの流れ込みの堆積があり④、その上面に比較的残りのよい瓦溜がみられる。下層は黄褐色地山土粒を含む黒色シルトの堆積⑤となる。

サブレンチ1 (Fig.7-3)では後世の遺構が多数重複して、いずれが本来のSD342の掘方であるかの判断が難しい。礫や瓦細片を多く含む固く締まる灰黄褐色

シルト層①は近現代の道路の路盤である。③～⑦は先行する地境溝とみられる。②～⑤層は締まりのない黒褐色シルト層で、上層の⑤層から近世の陶器摺鉢が出土している。⑦層は明黄褐色シルトブロックを含む粘質の黒色シルト混層で瓦片も出土するが、古代の溝堀方かどうか疑わしい。⑧～⑩層が締まりのある黒褐色シルトで底面近くから瓦が出土していることから、SD342本体である可能性が高い。⑨～⑩が初期の溝で、⑧に掘り直されたのであろうか。

SK344 調査区の北西隅で検出された隅丸方形の土坑状の遺構である。埋土は黄褐色シルト粒を含む黒色シルトである。肩はしっかりしているので風倒木痕とは異なると判断したが、今回は検出のみにとどめた。

4 出土遺物

SX341の瓦溜を主として土嚢袋100袋以上の瓦が出土した。現在も洗浄作業を進めているところであり、取り上げ時の印象としてしか語ることは出来ない。取り上げ時の印象として、出土瓦はすべて平瓦・丸瓦で、軒瓦および押印瓦は無い様である。また、SX341の瓦取り上げ、サブトレンチ掘削時を含めその他の遺構からも瓦以外の遺物、土器等は一切出土しなかった。

出土した瓦の全容の把握にはかなりの時間掛かると予想されるため、遺物整理についての結果報告は次年度の調査概要に見送ることとし、ここでは出土状況に特徴があり、完形に近い個体をいくつか紹介することに定める。平瓦①～③ (Fig.13) 凹面のくぼみが浅く平坦なタイプが大部分を占める①・②。湾曲が大きく、深いタイプ③は少数である。底面の縄目叩きも密で整然と行われ、端部のみならず、凹面の四方も幅広く面取りが行われ、非常に丁寧な仕上げのものが多くある。凹面全体を丁寧に横ケズするもの①と、布目・糸切り痕を焼残すものがある②・③。焼成はそれほど良好とは言えず軟質である。平坦なタイプは凸面が黒色から暗灰色を呈する物が多い。凸面に砂粒が付着している個体が多い。深いタイプは丸瓦同様の淡褐色を呈する。

丸瓦④～⑥ (Fig.14) 径が太く、全長が短いタイプである。側縁を面取りで仕上げる丁寧な仕上げのものが多く④・⑤が、端面に仕上げがなく、制作時の半裁の際に内面に入れた割線と破断した跡が残るタイプ⑥が若干みられる。④には凹面に粘土板の接合線が残る。両者とも体部及び玉縁の上面は丁寧に横ナデ調整され叩きの痕を

留めない。淡褐色を呈するものが多くみられる。焼成もやや甘く硬質とはいいたくない。

なお、瓦の製作技法や焼成は丁寧に、荒く雑なつくりの北方官衙の建物群の瓦に比べると、政庁のものに極めて近い印象を受ける。また、北方官衙にみられる押印文字瓦も見られず、これも一つの特徴といえる。ただ、政庁には多くみられる細身で長い丸瓦は今回出土していない。

5 6AIF-A区のみとめ

本調査区でのまず第1の課題は、第1次調査の荒子1調査区で確認された、瓦葺礎石建物の可能性がある遺構の再確認であった。

調査の結果、初期の外側溝とみられるSD340、改修・廃絶時の廃棄土坑を兼ねたとみられる溝SD343、その上面を覆う瓦の廃棄を兼ねた造成層SX341といった遺構群を検出した。1次調査において、このSD340を南辺外側溝とする建物(仮)SB345の存在を見事に言い当てていたといえる。ただし、調査の初期の調査であり遺構の判定も手探り状態であったためか、SD03(=SD340・SD343)が土塁状遺構(=SX341)の下にもぐりこんでいることを確認できておらず、風倒木痕を地山や遺構と見誤っているなどの不手際も少なからず判明した。

1次調査において、Y=45940.0ライン付近に南北方向の溝SD02・瓦溜SX02と土塁状遺構としている整地土層というほぼ同じ遺構が確認されているので、建物の西辺も南辺と同様の構造であると考えられる。SD340西端からSD343がみ出している部分に、荒子1区の溝SD02が対応することから、この部分の直下にSD02の南端が埋もれていると推定できる。SD340東端についても西端と対称的となっているので、こちらもSD343の突出部分に南北溝が存在すると見られる。6区の瓦溜の南端にわずかに顔を出している黒色土部分が東辺溝の南端かもしれない。結果として、外側溝は隅が切れた方形周溝墓の周溝様に掘られたようである。

なお、伊勢国府跡においてもすべての瓦葺礎石建体に外側溝が伴うわけではなく、少数派である。外側溝はよく言われるような雨落ち溝ではなく、建物の基壇の造成や修造の際に地山の黄褐色粘質のシルトを安易に得ることを主目的としているとみられ、中心的な殿舎で他から造成土を運搬する努力に富む場合は、掘られることはな

い。ただ、外側溝を伴わない場合、小規模な礎石建物の掘込地業はそれほど深くは行われていないため、耕作等で削平されてしまえばその存在も確認できないことになるともいえる。

さて、(仮)SB345の規模であるが、溝の内側の肩が失われているため正確な数字は出せないが、上に述べたように南辺溝SD340の延長19.5mが基壇の東西規模に近いと考えておきたい。なお、1次調査の概報では調査区北側にも土塁状遺構を認めたとし、南北規模は8mと想定しているが、対応する瓦含みの北辺外側溝については記載が無く、やや疑問が残る。

門を除く基壇建物の規模としては、方格地割中土居南区で確認されているSB131に次ぐ国府城内でも小規模な建物となる。あえて南北棟とすると南野南地区の

SBO01を越える規模となるので、これはあまり現実的ではない。

第2の課題としては、航空写真から読み取れる、荒子1区の南側の東西の地割り線の確認である。これは、サブレンチ1・3によって東西溝SD342を検出することが出来た。国府が営まれた時代に東西の区画が存在すること、それが地割として後世まで残ったことは事実となった。サブレンチ3では瓦を含む土は、黄褐色シルトとともに建物側から流れ込んでいる。南側に築地があったとは言えない。6AIF-F区のみでも触れたとおり調査区の制限から、この溝がさらに広い院の内部の単独の区画溝なのか、築地等に伴う溝で6AIF-F区の2条の溝とセットとなって(仮)SB345等の建物を囲む院を構成するかを決着づけるには至らなかった。

V 全体のまとめと今後の課題

今回の調査で、荒子地区に築地等で区画された院が存在し、中には瓦葺礎石建物が存在したことはほぼ事実となった。国府政庁と北方の官衙ブロック(方格地割)との間の100m以上の帯状の空白地帯とされていた範囲で、唯一確認された官衙的な施設である。特に出土瓦については政庁のものに類似し、区画の基準は方格地割との共通性を有するという点が注目される。政庁と北方官衙については出土遺物の時期等から一連の施設であるかまた同時存在であったかについて若干の疑問点が示されている。この荒子地区の遺構はその両者の間隙を埋めるため欠くことのできない手掛かりとなるだろう。

南と東に谷が迫る台地の辺縁部に敢て院を設けた理由など疑問に思われる点は多々あるが、今回も瓦以外の出

土遺物に乏しく、遺構の性格付けもままならない状況である。一帯は、一連の調査着手以前から土取りや工業施設の建築が進んだ地区で、新たな調査区の確保も困難となっている。しかし、6AIF-A区とした土地には若干の余裕があり、地権者の協力を得てもう少し継続的に建物群のあり方を探ることは可能である。

また、政庁を挟んだ方格地割西辺の南延長線上にも同様の区画が存在するのか否かの確認も、是非したいところである。しかし、残念ながら対象地は大部分が隣接の龜山市域に入るため、こちらも現体制での調査は困難を伴う。東西溝SD342の西への延長線上については鈴鹿市内で確認できる範囲はあるので、次年度以降に調査地を確保し、確認を進めたいと考えている。

【参考文献】

- 浅尾悟 1993 『伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）』
鈴鹿市教育委員会
- 石田浩司・杉立正徳・林和範 2001 『盤整備促進事業（担い手育成型）
国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 天王山遺跡 三宅神社遺跡 梅
田遺跡』鈴鹿市教育委員会
- 宇河雅之 1996 『長者屋敷遺跡』『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富
田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 宇河雅之 1997 『伊勢国府の方格地割』『研究紀要』第6号 三
重県埋蔵文化財センター
- 小倉整 2006 『伊勢国府跡 8』鈴鹿市考古博物館
- 杉立正徳 1997 『長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査報告』『鈴鹿
市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 杉立正徳 1997 『長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告』『鈴鹿
市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 鈴鹿市考古博物館 2002 『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウ
ム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007 『富士遺跡（第2次）』『鈴鹿市考古博物館年報』
第9号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007 『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2009 『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2010 『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2011 『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2016 『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
- 辻公則 1996 『国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～』
『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1997 『三宅神社遺跡』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1994 『伊勢国分寺・国府跡一長者屋敷遺跡ほか発掘調
査事業報告』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1996 『伊勢国分寺・国府跡』3 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1997 『伊勢国分寺・国府跡』4 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1998 『長者屋敷遺跡発掘調査概要（9次）』『鈴鹿市埋
蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1999 『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2000 『伊勢国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2001 『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2011 『伊勢国府の成立』『古代文化』第63巻第3号
財団法人古代学協会
- 新田剛 2011 『伊勢国府・国分寺跡』同成社
- 新田剛 2012 『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2013 『伊勢国府跡 15』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2014 『伊勢国府と関連遺構』『駒澤考古』39
- 新田剛 2015 『東海道 伊勢』『古代の都市と桑里』桑里制・古
代都市研究会 吉川弘文館
- 林和範 2006 『平田遺跡（5次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第
7号 鈴鹿市考古博物館
- 藤岡謙二郎・西村睦男 1957 『歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台
地の初期歴史時代遺跡群-軍團陸の問題と附近の開発をめぐっ
て-』『史迹と美術』第279号
- 藤原秀樹 1997 『三宅神社遺跡（第2次）』『鈴鹿市埋蔵文化財
調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹ほか 1995 『伊勢国分寺・国府跡 2』鈴鹿市教育委員
会
- 藤原秀樹 2014 『伊勢国府跡 16』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2015 『伊勢国府跡 17』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2016 『伊勢国府跡 18』鈴鹿市考古博物館
- 水野福松 1907 『高津瀬村誌』
- 水橋公恵 2005 『伊勢国府跡 6』鈴鹿市考古博物館
- 水橋公恵 2005 『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館
- 村山邦彦 1992 『鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究』『古代学研究』
128号 古代学研究会
- 山中敏史ほか 2003 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』独立行政
法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 吉田隆史 2009 『富士遺跡（第3次）』『鈴鹿市考古博物館年報』
第11号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2004 『伊勢国府（16次）』『鈴鹿市考古博物館年報』
第5号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2002 『伊勢国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2003 『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2004 『伊勢国府（16次）』『鈴鹿市考古博物館年報』
第5号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2004 『伊勢国府（17次）』『鈴鹿市考古博物館年報』
第5号 鈴鹿市考古博物館

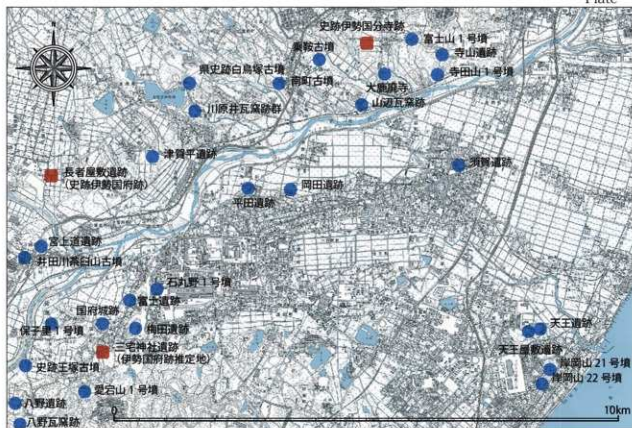


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 1/75,000



Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な寺院・官衙関連遺跡 1/200,000

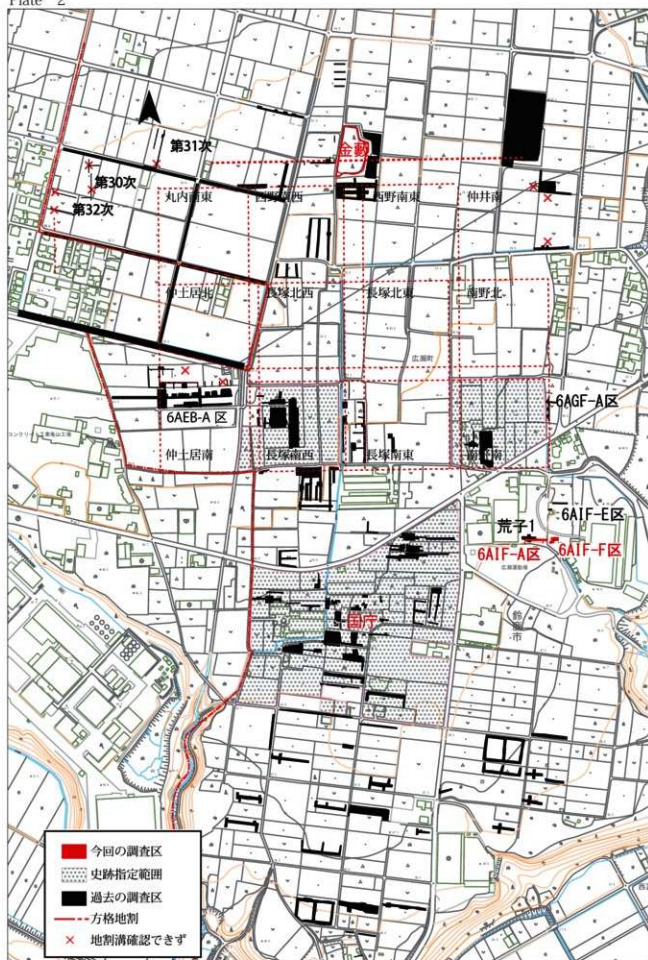


Fig.3 調査区位置図 (1:5,000)



Fig.4 調査区配置図 (1:2,000)



Fig.5 調査区周辺空中写真



Fig.6 拡大方格地割案 (宇河 1997 1:10,000)

Plate 4

1 SD340・SD343・SX341 サブトレンチ 2



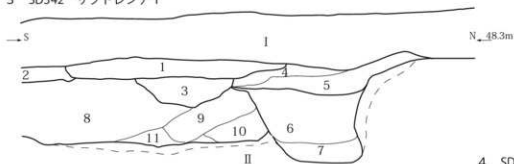
- 1 耕作土
 1 覆乱 10YR2/3 黒褐色シルト。
 2 覆乱 10YR3/1 黒褐色シルト。礫含む。
 3 SX341 整地層 10YR7/6 明黄褐色シルト。礫混じる。
 4 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色ブロック混じる。瓦・礫含む。
 5 SD340 埋土 10YR2/1 黒色シルト。
 6 SD340 埋土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。
 7 SD340 埋土 10YR2/1 黒色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト混じる。
 8 SD340 埋土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。
 II 基盤層 10YR6/6 明黄褐色シルト

2 SD340・SD343・SX341 サブトレンチ 4



- 1 耕作覆乱 10YR2/2 黒褐色シルト
 2 SX341 埋土 10YR3/3 暗褐色シルト。瓦大量に含む。
 3 SX341 埋土 10YR3/2 黒褐色シルト
 4 SD343 埋土 10Yr3/1 黒褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 5 SD343 埋土 10YR4/2 灰黄褐色シルト。
 6 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルト。
 7 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 8 SD343 埋土 10YR4/2 灰黄褐色シルト。10YR6/6 明黄褐色シルト・10YR1.7/1 黒色シルト混じる
 9 SD343 埋土 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 10 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルト。
 11 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 12 SD343 埋土 10YR2/1 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 13 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 14 SD343 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 15 SD343 埋土 10YR2/1 黒褐色シルト。
 16 SD343 埋土 10YR2/2 黒褐色シルト。
 17 SB345 補込地葉? 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 18 SB345 補込地葉? 10YR2/2 黒褐色シルトに、10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 19 SD340 埋土 10YR2/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト混じる。
 I 基盤層 10YR6/6 明黄褐色シルト。

3 SD342 サブトレンチ 1



- 1 耕作土
 1 路盤 10YR4/2 灰黄褐色シルト。礫・瓦混じり固く締まる。
 2 旧表土 10YR3/1 黒褐色シルト。
 3 近世溝埋土 10YR2/2 黒褐色シルト。
 4 近世溝埋土 10YR3/1 黒褐色シルト。
 5 近世溝埋土 10YR3/2 黒褐色シルト。礫混じる。近世陶器出土。
 6 近世溝埋土 10YR3/1 黒褐色シルト。
 7 近世溝埋土 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色ブロック混じる。瓦含む。
 8 SD342 埋土 10YR2/1 黒色シルト。大ぶりの礫含む。
 9 SD342 埋土 10YR3/1 黒色シルト(クロボク)。礫混じる。
 10 SD342 埋土 10YR2/1 黒色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルト粒含む
 11 SD342 埋土 10YR3/1 黒褐色シルト
 II 基盤層 10YR6/6 明黄褐色シルト

4 SD342 サブトレンチ 3



- 1 耕作土
 1 近世溝埋土 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。
 2 近世溝埋土 10YR5/8 黄褐色地山土ブロックに 10YR3/1 黒褐色シルト混じる。
 3 SD342 埋土 10YR1.7/1 黒褐色シルト。締まりはなく。大量の瓦含む。
 4 SD342 埋土 10YR5/6 黄褐色シルトに。10YR3/1 黒褐色シルト粒混じる。
 5 SD342 埋土 10YR2/1 黒色シルト。
 II 基盤層 10YR6/6 明黄褐色シルト

Fig.7 6A1F-A区サブトレンチ断面図 (1/40)

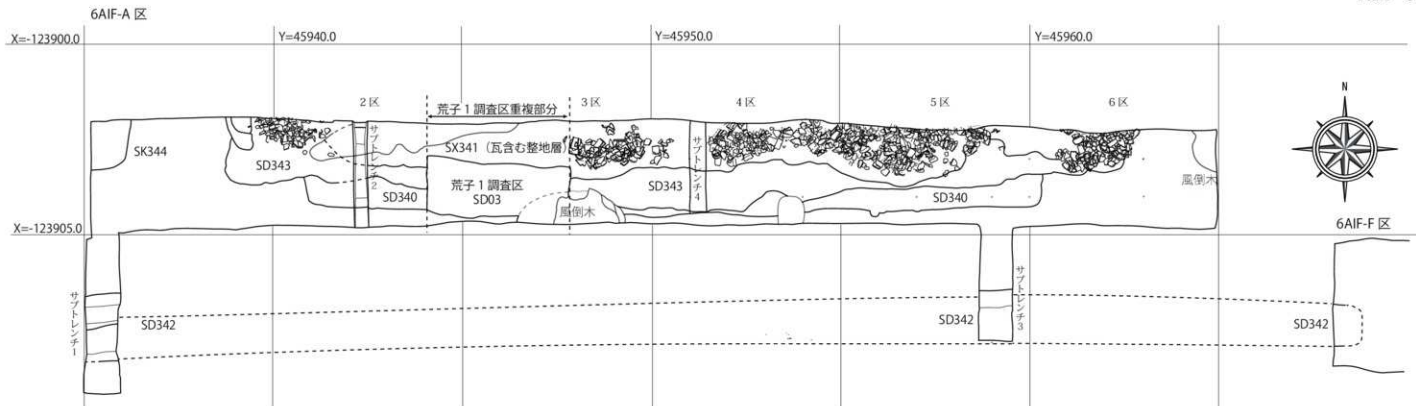


Fig.8 6AIF-A 区遺構平面図 (1:100)

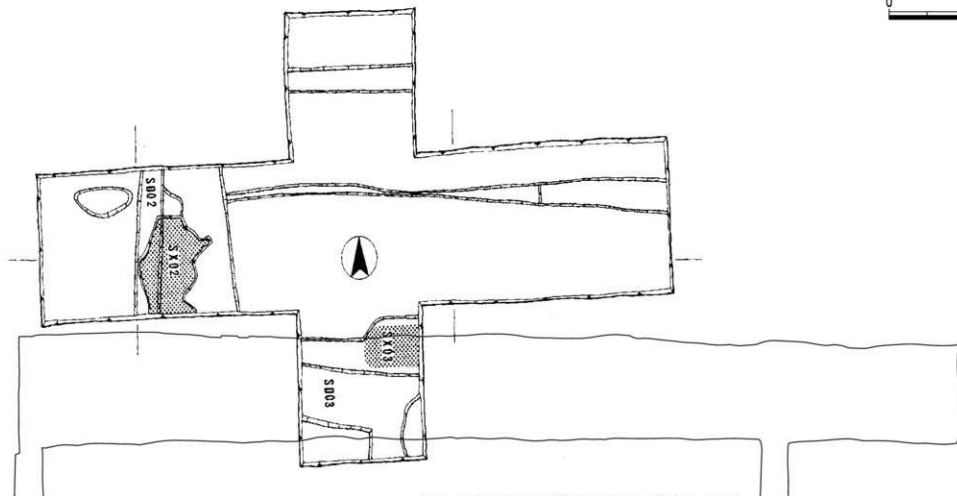


Fig.9 6AIF-A 区と第1次調査荒子1区との関係図 (1:100)

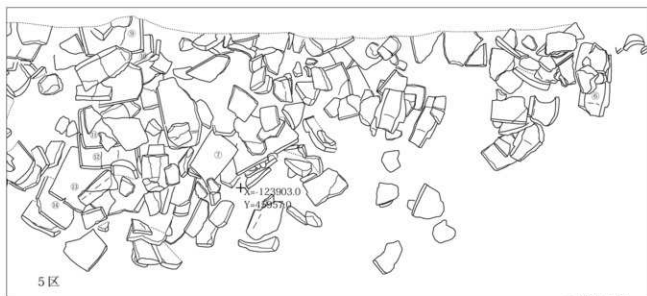
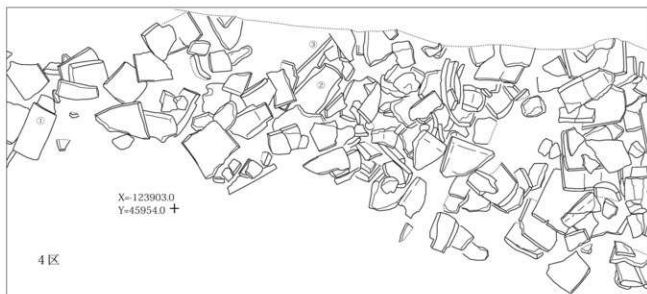
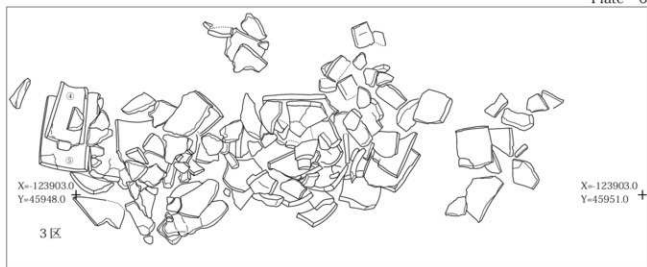


Fig.10 6AIF-A区瓦出土状況図 (1:20)

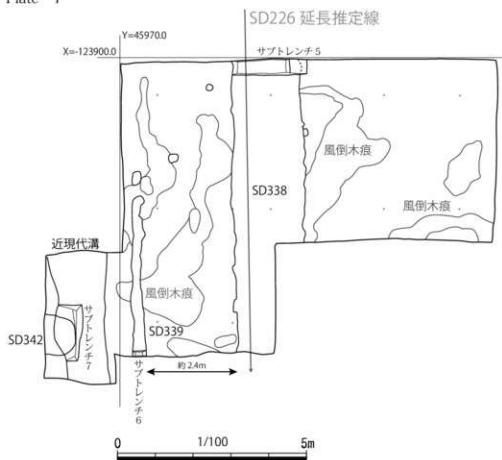
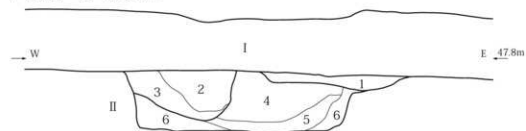


Fig.11 6AIF-F区遺構平面図 (1:100)

1 SD338 サブトレンチ5



- I 耕作土
- 1 耕作溝埋土 10YR5/3 黒褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒含む。
- 2 SD338 上層溝埋土 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒含む。
- 3 SD338 上層溝埋土 10YR2/1 黒色シルト。礫混じる。
- 4 SD338 埋土 10YR2/1 黒色シルト。礫混じる。

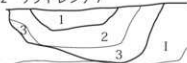
- 5 SD338 埋土 10YR3/2 黒褐色シルトに 10Yr5/6 黄褐色シルト粒多く混じる。
- 6 SD338 埋土 10YR4/2 灰黄褐色シルトに 10YR3/2 黒褐色シルト混じる。
- II 基礎層 10YR5/6 黄褐色シルト。

2 SD339 サブトレンチ6



- I 耕作土
- 1 SD339 埋土 10YR2/1 黒色シルト。
- 2 SD339 埋土 10YR2/2 黒褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト混じる。
- II 基礎層 10YR6/6 明黄褐色シルト。

3 SD342 サブトレンチ7



- 1 上層溝埋土 10YR3/1 黒色シルト、10YR6/6 明黄褐色土混じる。礫混じる。
- 2 SD342 埋土 10YR2/1 黒色シルト、10YR6/6 明黄褐色土粒混じる。礫含む。
- 3 SD342 埋土 10YR2/1 黒色シルトに 10YR6/6 明黄褐色土混じる。礫多い。
- I 基礎層 10YR6/6 明黄褐色土。

Fig.12 6AIF-F区サブトレンチ断面図 1・2 (1/50) 3 (1/40)

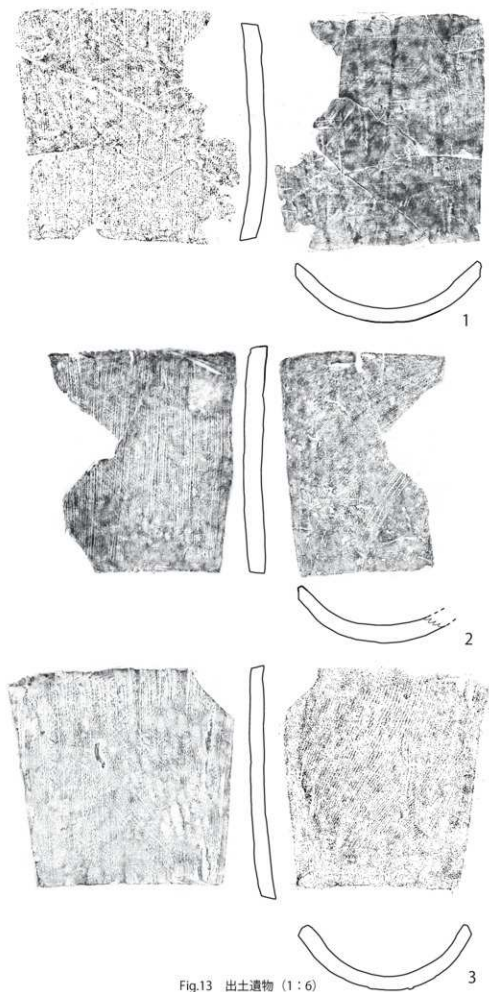


Fig.13 出土遺物 (1 : 6)

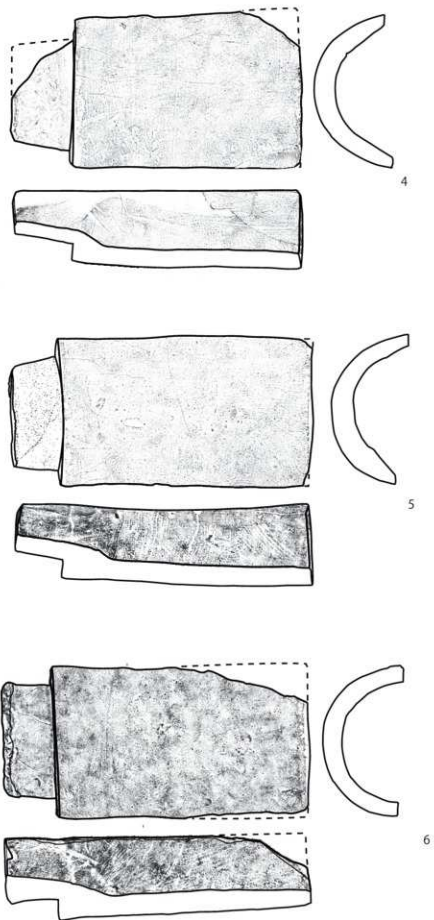


Fig.14 出土遺物 (1:4)



6AIF-A 区調査区全景 (東から)



6AIF-F 区調査区全景 (西から)



6AIF-A 区調査前風景 (東から)



6AIF-A 区全景 (西から)



6AIF-A 区全景 (東から)



SD340・SD343 西端 (東から)



SD340・SD343 東端 (北から)



SX341-6 区瓦出土状況 (北から)



SX341-3 区瓦出土状況 (北西から)



SX341-4 区瓦出土状況 (北西から)



SX341-5 区瓦出土状況 (西から)



SX341 瓦出土状況【平瓦の上に反転丸瓦】(北から)



SX341 瓦出土状況【平瓦の重なり】(北西から)



サブトレンチ1 SD342 (東から)



サブトレンチ3 SD342 (北東から)



SD340・SD343 サブトレンチ2 (南東から)



SD340・SD343 サブトレンチ4 (北東から)



6AIF-F 区調査前 (南東から)



6AIF-F 区全景 (西から)



SD338・SD339 (南から)



SD338・SD339 (北東から)



SD342 東端・耕作溝 (北から)



SD338 サブトレンチ 5



SD339 サブトレンチ 6



SD342 サブトレンチ 7



出土遺物 平瓦



出土遺物 丸瓦

Tab.2

報告書抄録

ふりがな	いせこくふあとじゅうきゅう								
書名	伊勢国府跡 19								
副書名									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	藤原秀樹								
編集機関	鈴鹿市文化スポーツ部文化財課								
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町2-2-4番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL 059 (374) 1994								
発行年月日	2017年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡) 第35次	鈴鹿市広瀬町 字荒子 891 番・892 番		242071	363	34° 53′ 14″	136° 29′ 02″	2017年 1月10日 ～ 2017年 3月9日	159㎡	学術調査
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
	官衙	奈良・平安	溝・整地層 ピット・風倒木痕		平瓦・丸瓦・山茶碗・土師器			方格地割の東辺区画が南に伸びることを確認した。2条の溝が2.4mの間隔で平行し、築地塀により区画されるか。区画内は、東西溝で区画され、東西約19mの礎石建ち瓦葺き建物が建っていた。	

伊勢国府跡 19

発行日 平成 29 (2017) 年 3 月 31 日
編集・発行 鈴鹿市
文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループ
〒 5 1 3 - 0 0 1 3
三重県鈴鹿市国分町 2 2 4 番地 鈴鹿市考古博物館内
TEL 0 5 9 (3 7 4) 1 9 9 4
FAX 0 5 9 (3 7 4) 0 9 8 6
E-mail : bunkazai@city.suzuka.lg.jp
印刷 早川印刷株式会社

Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.19

March, 2017

Suzuka City